

# 山南遺跡・彼ノ宗遺跡発掘調査報告書

～善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 5～

1999年3月

善通寺市教育委員会



山南遺跡・SK-05 棟出状況(西から)



山南遺跡・ST-01 棟出状況(西から)

## 序

善通寺市内の埋蔵文化財調査事業は今回で5回目となります。この発掘調査は開発等が予想される地域の埋蔵文化財の所在、範囲及び性格を明らかにし、その保護のため基礎的な資料を整えることを目的とした事業であります。

今回も市内の田園地帯や周知の遺跡の周辺で事業を実施いたしました。山南遺跡ではこれまで遺跡などが全く知られていなかった場所でさまざまな時代の遺構や遺物を発見することができました。また、旧練兵場遺跡群の東端に位置する彼ノ宗遺跡では、集落の縁辺を確認することができました。

いずれも調査範囲は狭く限られたものではありましたが、このような資料の蓄積が、各遺跡の周辺で今後行われるであろう開発に、速やかに対応するための根拠や調査のための基礎資料となるのです。

そのためには、些細な資料でも、広範囲で各時代の資料をできるだけ多く蓄積することが大切なのです。市内の文化財保護、速やかな開発への対応のため、今後も地道な作業を続けたいと考えておりますので、ご理解とご協力を切にお願い申し上げます。

また、このたびの発掘調査事業実施にあたり、ご協力をたまわりました関係機関の方々、また報告書刊行にあたり、ご指導ご助言をたまわりました諸先生各位に厚くお礼申し上げますとともに、発掘調査に携わられた皆様のご苦労にも心から感謝申し上げます。

平成11年3月31日

善通寺市教育委員会  
教育長 勝田英樹



## 例　　言

1. 本書は善通寺市教育委員会が国庫補助事業として実施した埋蔵文化財調査事業（善通寺市内遺跡発掘調査事業）の発掘調査報告書である。
2. 本事業では善通寺市生野町字山相 2919-1・2920・2921・2922（山南遺跡）において平成 10 年 6 月 16 日から同年 7 月 27 日まで、善通寺市仙遊町二丁目 680-223（旧練兵場遺跡・彼ノ宗地区）で平成 10 年 8 月 17 日から同年 9 月 1 日まで発掘調査を実施し、平成 10 年 11 月 4 日から両遺跡の調査資料と出土遺物の整理作業を実施した。
3. 本書の編集作業は善通寺市教育委員会 文化振興室主事 笹川龍一が行った。各遺跡の実測や周辺部の測量調査、写真撮影は四国学院大学考古学研究部の協力を得て笹川が行った。また、本書に掲載した遺物の実測は岩井弘恵の協力を得た。
4. 本事業実施及び本書の編集にあたっては、次の方々・機関より多大なご指導・御援助並びに資料提供、助言を得た。記して謝意を表します。（敬称略・順不同）

(財)香川県埋蔵文化財調査センター・廣瀬常雄・中西 昇・島田英夫・片桐孝浩・  
山本英之・山元敏裕・大嶋和則・岩井弘恵・四国学院大学考古学研究会

調査参加者 石村 守・井原康夫・山田金太郎・藤沢 進・岡村幸広・西 智也

## 目　　次

第一章 遺跡周辺の地理と歴史 .....	6
第二章 山南遺跡 .....	13
①調査の概要と遺構 .....	13
②出土遺物 .....	22
③小　　結 .....	23
第三章 旧練兵場遺跡群(彼ノ宗遺跡) .....	25
①調査の概要と遺構 .....	25
②出土遺物 .....	28
③小　　結 .....	28
図　版 .....	30
抄　録 .....	39

## 図 版 目 次

グラビア 山南遺跡 SK-05 検出状況 .....	1
山南遺跡 ST-01 検出状況 .....	1
<b>挿 図</b>	
第1図 調査地遠景 .....	6
第2図 調査地と周辺の主要遺跡 .....	9
第3図 山南遺跡調査地周辺図 .....	13
第4図 山南遺跡トレンドチ配置図 .....	14
第5図 第1トレンドチ遺構検出状況平面図 .....	16
第6図 第1トレンドチ南側壁面土層実測図 .....	17
第7図 第2トレンドチ遺構検出状況平面図 .....	19
第8図 第2トレンドチ北側壁面土層実測図 .....	20
第9図 第3トレンドチ遺構検出状況平面図 .....	21
第10図 第3トレンドチ北側壁面土層実測図 .....	22
第11図 山南遺跡出土石器実測図 .....	23
第12図 山南遺跡出土土器実測図 .....	24
第13図 彼ノ宗遺跡トレンドチ配置及び周辺図 .....	25
第14図 第1トレンドチ北側壁面土層実測図 .....	26
第15図 第2トレンドチ遺構検出状況平面図 .....	27
第16図 彼ノ宗遺跡出土石器・土器実測図 .....	29
<b>写 真 図 版</b>	
第17図 山南遺跡調査地全景(北東から)～調査前の状況～ .....	31
第18図 山南遺跡・重機による掘削作業(西から)～第1トレンドチ～ .....	31
第19図 山南遺跡・SK-04 検出状況及び遺物出土状況(南から) .....	32
第20図 山南遺跡・SK-05 検出状況及び遺物出土状況(南から) .....	32
第21図 山南遺跡・SK-05 検出状況及び遺物出土状況(西から) .....	33
第22図 山南遺跡・第1トレンドチ完掘状況(東から) .....	33
第23図 山南遺跡・第2トレンドチ西側完掘状況(東から) .....	34
第24図 山南遺跡・第2トレンドチ東側完掘状況(東から) .....	34
第25図 山南遺跡・ST-01 床面遺物出土状況(西から) .....	35
第26図 山南遺跡・第2トレンドチ拡張後の状況(東から) .....	35
第27図 山南遺跡・ST-01 完掘状況(西から) .....	36
第28図 山南遺跡・第3トレンドチ完掘状況(東から) .....	36
第29図 彼ノ宗遺跡・重機による掘削作業(北西から)～第1トレンドチ～ .....	37
第30図 彼ノ宗遺跡・第1トレンドチ完掘状況(南西から) .....	37
第31図 彼ノ宗遺跡・第2トレンドチ発掘調査作業風景(南西から) .....	38
第32図 彼ノ宗遺跡・第2トレンドチ完掘状況(南西から) .....	38

## 第一章 遺跡周辺の地理と歴史

善通寺市は香川県西部の内陸部に位置し、真言宗開祖の弘法大師(空海)が誕生した土地として有名な田園都市であり、總本山善通寺の門前町として発達している。

東は丸亀市、西は三豊郡高瀬町・三野町、南は仲多度郡琴平町、北は仲多度郡多度津町と境を接している。

善通寺市周辺に広がる丸亀平野は、土器川や金倉川・弘田川の沖積によって形成された香川県下最大の沖積平野で、これらの河川による扇状地・氾濫原・小三角州などから形成されており、南から北に下るゆるやかな傾斜になっているため、たいていの場所から瀬戸内海や対岸の岡山を望むことができる。この河成沖積層の土壤は、下層土が灰褐色のマンガン結核を含む黄褐色砂質土層、表層 70~80 cm が強粘土質砂礫層で構成されており、通常弥生時代以後の遺構はこの下層上面に遺存している。この黄褐色砂質土層中には希に縄文土器片が含まれていることが知られていたが、近年実施された四国横断自動車道路建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査などによって、この土層は縄文時代後期から晩期にかけて堆積したものであることが確認されている。

また、善通寺市の北には讃岐の中世山城跡を代表する天霧城跡が山頂部に所在する雨霧山、西から東にかけては、火上山・中山・我拝師山・筆の山・香色山が麓をつらねて並んでおり、五岳と呼ばれるこれらの山塊は、あたかも五枚の屏風をたてかけたようにそびえていることから、この山麓の地は屏風ヶ浦とも呼ばれ、当地の人々に親しまれ、古くから信仰の対象であったことが伺える。その南には、中山に連なる東部山・有岡の里を経て大麻山がそびえており、平地中には鶴が峰・磨臼山・如意山・鉢伏山・甲山などの小丘が散在している。



第1図 調査地遠景

背後の山は左端から大麻山・香色山・筆ノ山・我拝師山(この手前の小丘が甲山)・中山・火上山

瀬戸内海の南岸に位置し気候と風土に恵まれた丸亀平野は、かなり古くから人間の文化が開けた土地であり、丸亀市の中ノ池遺跡・善通寺市の五条遺跡・善通寺市から仲多度郡にかけて広がる三井遺跡など、弥生時代前期から中期にいたる同時代の遺跡群が知られている。中ノ池遺跡では環濠と想定される三重の大溝が検出され、弥生時代前期の古段階の特徴をもつ弥生土器を中心に、一部中期的様相を呈するものまで出土している。三井・五条遺跡では、遺構・遺跡の範囲などについては現在も全く不明の状態であるが、出土した土器片については、畿内第1様式の中段階から新段階に相当することが確認されている。

また、これらの遺跡群は自然堤防上に立地すると考えられており、現在の海岸線からの距離は2~3kmを計るが、当時の復元海岸線が現在の標高5mあたりと推定すれば、三井・中ノ池遺跡などは海岸部に形成された集落であることがわかる。そして、更にこれらの遺構が遺存する黄褐色砂質土層とこの下の洪積層の間には、縄文時代後期から晩期の生活痕が確認されている。また、四国横断自動車道路建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査によって、吉原町から旧石器も確認されており、現在のところ善通寺市の古代文化は約2~3万年前まで遡ることができるようである。

善通寺市街地の北一帯には香川県を代表する弥生時代の中枢的な集落遺跡がある。西は筆の山の山裾から、東は四国農業試験場の敷地にまで及んでおり、ここがもと練兵場用地であったことから旧練兵場遺跡と呼ばれている。そして、ここから東には九頭神遺跡・稻木遺跡・石川遺跡と続いているが、いずれの遺跡も近年までは本格的な調査は実施されておらずその詳細は明らかにされていなかった。

しかしながら、昭和30年頃の四国農業試験場の用地整備工事に伴って、弥生時代前期から後期にかけての小児壺棺十数点・多数の土器、石器類が出土したことや、県道の整備工事の際に国立病院のあたりから弥生土器に加えて須恵器や小玉などが出土したことなどから、遺跡は弥生時代のみならず、古墳時代にまで及んでいることが確認されている。

旧練兵場遺跡はこのように広い範囲に及ぶ可能性が強いばかりでなく、弥生時代前期から後期、古墳時代にかけての連続性が考えられる、県下でも例のない存在が知られている。ただ、最近の調査によってこの旧練兵場遺跡は幾つかの川道によって分断されていることが解り、旧練兵場遺跡群としてとらえた方が良いと考えられる。

この遺跡群でこれまでに数多くの発掘調査が実施されている。以下、主な調査を順に紹介する。總本山善通寺の西に流れる弘田川沿いで昭和52年に実施された善通寺西遺跡では、弥生時代後期から古墳時代にかけての用水路が検出され、多数の小型丸底壺・船の櫂や柱材などが出土しており、生活基盤である水田域の拡大が行われたことや古い溝の廃絶に伴う祭祀が行われたことが確認されている。続いて、昭和53年には遺跡群の東端部に所在する白鳳時代建立と考えられる善通寺の前寺・仲村廃寺(伝導寺跡)の発掘調査が実施され、寺域の北端と、更にその下層では弥生時代中期から古墳時代にかけての遺構が検出された。

昭和 59 年には善通寺西遺跡から弘田川沿いの 600m 程下流に所在する彼ノ宗遺跡の発掘調査が実施されたが、ここでは約 1,500 m<sup>2</sup> の調査区から弥生時代中期から後期にかけての 40 棟以上の堅穴住居・小児壺棺墓 15 基・無数の柱穴と土坑群、古墳時代の掘建柱建物跡 2 棟とそれに伴う水路、二重の周溝をもつ多角形墳の基底部などが夥しい生活の痕跡が確認されている。特に弥生時代終末期の堅穴住居からはその廃絶時の祭祀に用いられたと考えられる仿製內行花文鏡片の懸垂鏡や銅鏡・多数の玉類が出土しており、この地区における弥生時代終末期の動向を推測する上で注目されている。昭和 60 年には彼ノ宗遺跡から東に約 500m 程の仙遊遺跡で弥生時代後期の箱式石棺と小児壺棺墓 3 基が発見されたが、この箱式石棺の石材には入れ墨を施した人面や鳥の絵の他、直弧文状の文様が一面に線刻されていたことから全国的な話題となった。

そして、国立病院や四国農業試験場などではこれまで頻繁に発掘調査が行われているが、いずれの調査でも住居跡が複合し密集した状態で遺存しており、正確な集落の規模は今も把握できていない。

また、ここから北方に広がる善通寺平野には、旧練兵場遺跡と同様に弥生時代の古い時期から古墳時代にかけての大規模な集落遺跡が幾つか知られている。まず旧練兵場遺跡から北方 500mあたりには九頭神遺跡があり、ここでは昭和 62 年に都市計画道路改良工事に伴う発掘調査が実施され、弥生時代後期頃の堅穴住居や小児壺棺墓・箱式石棺墓等が確認されている。九頭神遺跡から東方 500mあたりには弥生時代から古墳時代にかけての遺物が多量に散布することで知られる石川遺跡が広がるが、未調査のため詳細は不明である。

九頭神遺跡から北方に隣接する稻木遺跡では、四国横断自動車道路建設に伴う調査が昭和 58 年 5 月から昭和 60 年 3 月にかけて、また県道善通寺白方線改良工事に伴う調査が昭和 61 年度と昭和 63 年度の二回に分けて実施されており、やはり弥生時代から古墳時代にかけての堅穴住居群や墓地、中世の建物跡群などが確認されている。旧地形をみると、これらの集落遺跡群はいずれも旧河道と旧河道の間に形成された微高地に営まれたものであり、これまでの調査結果からいずれも同時期に併存したものであることもわかる。従って弥生時代頃の善通寺周辺部には、“大集落”というよりはむしろ“地方都市”が誕生していたと考えた方が良いかも知れない。

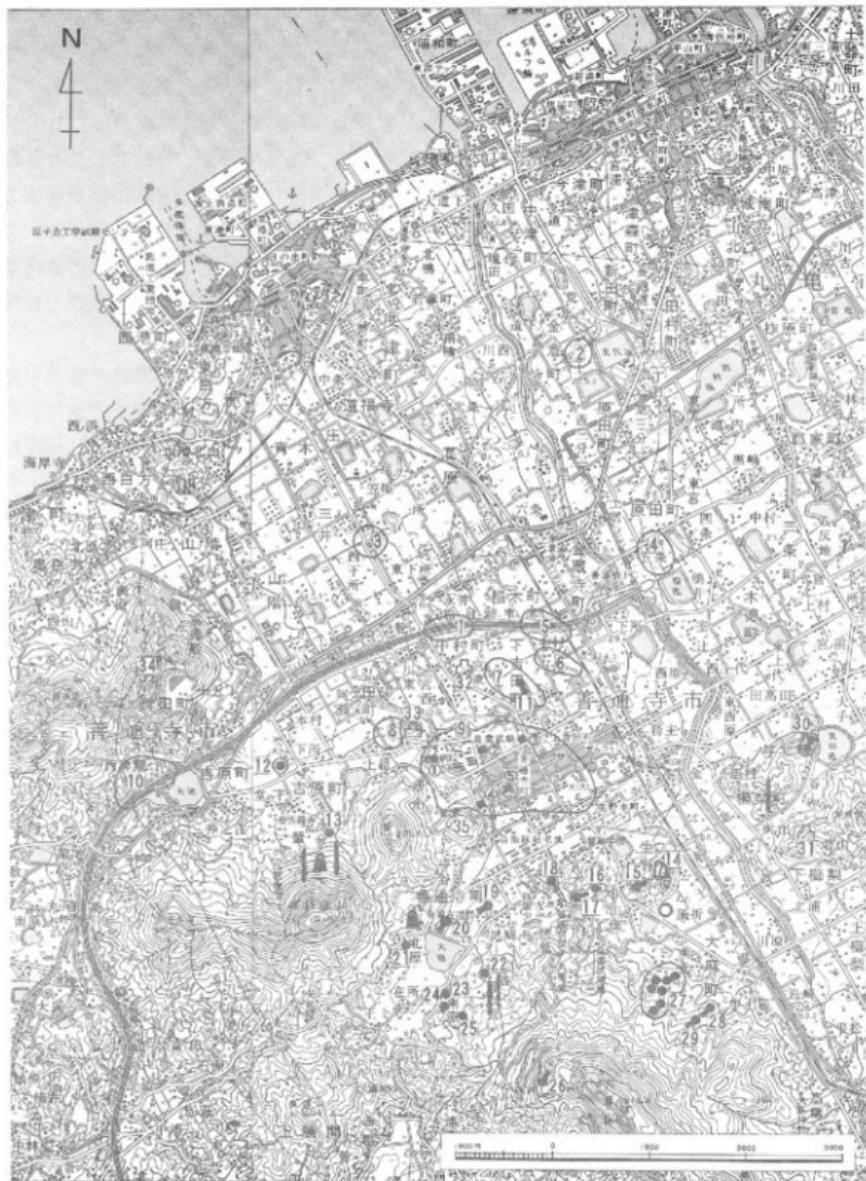
- |          |             |                  |                    |              |
|----------|-------------|------------------|--------------------|--------------|
| 1. 永井遺跡  | 9. 旧練兵場遺跡群  | 12. 青龍古墳         | 20. 菊塚古墳           | 28. 大麻山輪貸塚   |
| 2. 中ノ池遺跡 | ①彼ノ宗遺跡(横谷山) | 13. 大塚池古墳        | 21. 北原古墳           | 29. 大麻山莊塚    |
| 3. 三井遺跡  | ②仙遊遺跡       | 14. 磨臼山祭祀遺跡      | 22. 瓦谷 1 号墳        | 30. 薄山古墳群    |
| 4. 五条遺跡  | ③仲村庵寺(白鳳)   | 15. 嘉臼山古墳【史跡】    | 23. 御館神社古墳         | 31. 櫛梨城跡(中世) |
| 5. 稲木遺跡  | ④善通寺西遺跡     | 16. 鶴が峰山頂古墳      | 24. 宮が尾 1・2 号墳【史跡】 | 32. 仲村城跡(中世) |
| 6. 石川遺跡  | ⑤善通寺伽藍(奈良)  | 17. 鶴が峰 4 号墳【史跡】 | 25. 宮が尾 3 号墳       | 33. 甲山城跡(中世) |
| 7. 九頭神遺跡 | 10. 矢ノ塚遺跡   | 18. 丸山古墳【史跡】     | 26. 野田院古墳【史跡】      | 34. 天驍城跡(中世) |
| 8. 甲山北遺跡 | 11. 下吉田神社古墳 | 19. 王墓山古墳【史跡】    | 27. 岡古墳群           | 35. 香色山経塚群   |

■:銅鐸出土地

■:銅劍出土地

■:銅矛出土地

○: 山南遺跡(調査地)



第2図 調査地と周辺の主要遺跡

また、善通寺市内からは与北山の陣山遺跡で平形銅劍 3 口、大麻山北麓の瓦谷遺跡で平形銅劍 2 口・細形銅劍 5 口・中細形銅鉢 1 口の計 8 口、我拝師山遺跡では計 3 カ所から平形銅劍 5 口・銅鉢 1 口、北原シンネバエ遺跡で銅鉢 1 口など、青銅器が数多く出土しており、旧練兵場遺跡群や周辺部の遺跡群を本拠とした集団との関連も注目される。

やがて弥生時代に開始された稻作文化は完成期を迎える、丸龜平野という肥沃な生産基盤を背景に、独自の技術を持った特定の有力者が灌漑治水事業などをを行い耕作面積を増大させ、地域を代表する権力者となり有岡地区を中心に数多くの墳墓を築くようになるが、古墳時代を迎えるこの地の勢力は更に発展を続けていく。旧練兵場遺跡では弥生時代の集落遺構群に古墳時代の集落遺構群が幾重にも重なり、発掘調査の際には遺構の複合状況を把握することが困難と思われる状況が頻繁にみられる。

この頃の集落域は市街地から北方と東方に広がりを見せ、市街地の南西部の丘陵部が墓域と推定されている。この地区的古墳は確認されているだけでも 400 基を超えており、中でも香色山・筆ノ山・我拝師山で北部を、大麻山で南部を限られた弘田川流域の有岡地区は前方後円墳が集中する地域として有名である。

まず古段階の古墳としては、大麻山山麓中でも比較的高所を中心に大麻山椀貸塚、大麻山経塚、野田院古墳、御忌林古墳、大窪経塚古墳、丸山 1 号・2 号墳など数多くの積石塚が築かれているが、御忌林と丸山 2 号墳以外は全て前方後円墳であり、積石塚古墳分布範囲の最西限に位置している点でも注目できる。中でも野田院古墳は大麻山北西麓(標高 405m)のテラス状平坦部という全国的にも有数の高所に立地する丸龜平野最古段階の前方後円墳で、前方部は盛り土、後円部は積石塚で構築されている。

また、有岡地区の平地部分には、前期から後期にかけての多数の前方後円墳が直線的に並んで築かれている。北東から南西方向に順に生野罐子塚古墳(消滅)・磨臼山古墳・鶴が峰 2 号墳(消滅)・鶴が峰 4 号墳・丸山古墳・王墓山古墳・菊塚古墳が知られており、その状況から同一系譜上の首長墓群と考えられているが、中でもその中央の小丘陵上に築かれた王墓山古墳は一際目を引く存在である。

古墳時代後期末になると大麻山山麓部の至る所に群集墳が出現する。現存する群集墳の中には線刻画で装飾された横穴式石室が計 8 基確認されており、それらが共通モチーフを有している点は大変興味深い。宮が尾古墳もそのひとつである。線刻画ではそのモチーフの正体を把握しにくいものが多いが、宮が尾古墳には、周辺の装飾古墳と共通したモチーフの他、人物群や船、騎馬人物が具象的に描かれており、装飾古墳を考える上で極めて貴重な存在と考えられている。

この頃の丸龜平野は金倉川の東が郡河郡、西が多度郡と呼ばれており、多度郡には佐伯一族が勢力をもっており、有岡一帯の前方後円墳群についても佐伯の一代系譜の墓とする考えが有力である。

やがて仏教の伝来に伴い、白鳳期には佐伯の氏寺である伝導寺(仲村廃寺)が旧練兵場遺跡の一角に建立される。しかしながらこの寺は短期間で消滅してしまい、後に 500m程南に移転されたものが現在の善通寺伽藍ではないかと考えられている。

奈良時代末、宝亀五年(774)この地の有力豪族であった佐伯氏に弘法大師が誕生する。平安初期、大同二年(807)に唐から帰朝した大師が、長安の青竜寺を模して今の伽藍の場所に真言宗最初の根本道場として善通寺を建立した。創建当時は四町四方の境内に金堂や大塔、講堂、法華堂、西塔、護摩堂の他、四十九の僧房があったといわれているが、平安時代末頃から鎌倉時代、そして南北朝時代にかけては、社会環境の大きな変化に伴い幾度も荒廃の危機に曝された。これを反映するように、善通寺の西側に隣接する香色山山頂では平安時代末頃の経塚群が確認されている。末法思想を背景として、この地に活動の基盤とした貴族(佐伯)や善通寺の僧侶達が造り上げたものであるが、中には子孫のために經筒などの埋納場所を事前に確保しておいたとみられる上下二段構造の経塚(香色山 1 号経塚)が 1997 年夏に確認され注目を集めた。

善通寺は戦国時代、永祿元年(1558)には香川・三好両軍の戦火により焼失してしまう。その復興が始まるのは、やがて江戸時代に徳川幕府が封建制度を確立してからのことであるが、四国八十八カ所巡礼や金毘羅参りが全国的な信仰行事となるのはこの頃からであり、八十八カ寺のうち五カ寺がある善通寺市は善通寺を中心に門前町として活気を取り戻す。

明治 29 年には第十一師団が設置され、門前町に軍都としての性格を帯びるようになったが、このため道路や鉄道が整備された。この頃建設された洋風デザインの建造物群は市街地に今も多数残され、独特の景観を呈している。

これにより善通寺町として都市化が始まり、昭和 29 年 3 月 31 日に竜川村・与北村・筆岡村・吉原村との合併により市制が施行され、善通寺市が誕生した。

## 参考文献

『善通寺市の古代文化』	矢原高幸・善通寺市	1973 年 11 月
『善通寺市史・第一巻』	善通寺市	1977 年 7 月
『中の池遺跡発掘調査報告書』	丸亀市教育委員会	1982 年 3 月
『香川叢書・考古篇』	香川県教育委員会	1983 年 3 月
『王墓山古墳調査概報』	善通寺市教育委員会	1983 年 3 月
『五条遺跡発掘調査報告書』	善通寺市教育委員会	1983 年 11 月
『仲村廃寺発掘調査報告書』	善通寺市教育委員会	1984 年 3 月
『彼ノ宗遺跡』	善通寺市教育委員会	1985 年 3 月
『仙遊遺跡発掘調査報告書』	善通寺市教育委員会	1986 年 3 月
『九頭神遺跡発掘調査報告書』	善通寺市教育委員会	1988 年 3 月

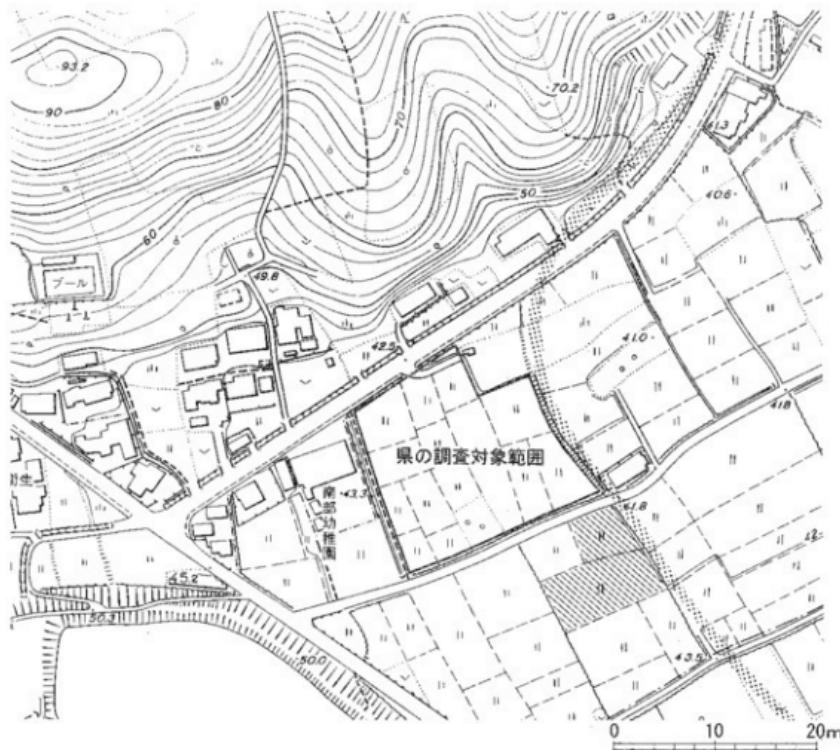
『稻木遺跡』	稻木遺跡発掘調査団	1989年3月
『仲村廃寺』	善通寺市教育委員会	1989年3月
『史跡有岡古墳群(王墓山古墳)保存整備事業報告書』	善通寺市教育委員会	1992年3月
『史跡有岡古墳群(宮が尾古墳)保存整備事業報告書』	善通寺市教育委員会	1997年3月
『御館神社古墳発掘調査報告』	善通寺市教育委員会 ～善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1～	1993年3月
『青龍古墳調査報告書』	善通寺市教育委員会 ～善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書2～	1994年3月
『九頭神遺跡・宮が尾古墳隣接地調査報告書』	善通寺市教育委員会 ～善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書3～	1995年3月
『香色山山頂遺跡群調査報告書』	善通寺市教育委員会 ～善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書4～	1996年3月
四国横断自動車道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査実績報告書		
第一冊 『中村・乾・上一坊遺跡』	香川県教育委員会	1987年3月
第三冊 『矢ノ塚遺跡』	香川県教育委員会	1987年10月
第六冊 『種木廃寺』	香川県教育委員会	1989年3月
第九冊 『永井遺跡』	香川県教育委員会	1990年12月

## 第二章 山南遺跡

### ①調査の概要と造構

当該地は南から西側が大麻山(標高616m)の北斜面、北が磨臼山(標高119m)・鶴ヶ峰(標高129m)と呼ばれる独立丘陵に挟まれた谷地形の北側緩斜面で、東に向かって大きく開く地形の先端にあたり、標高は現況地表面で約42mの位置である。

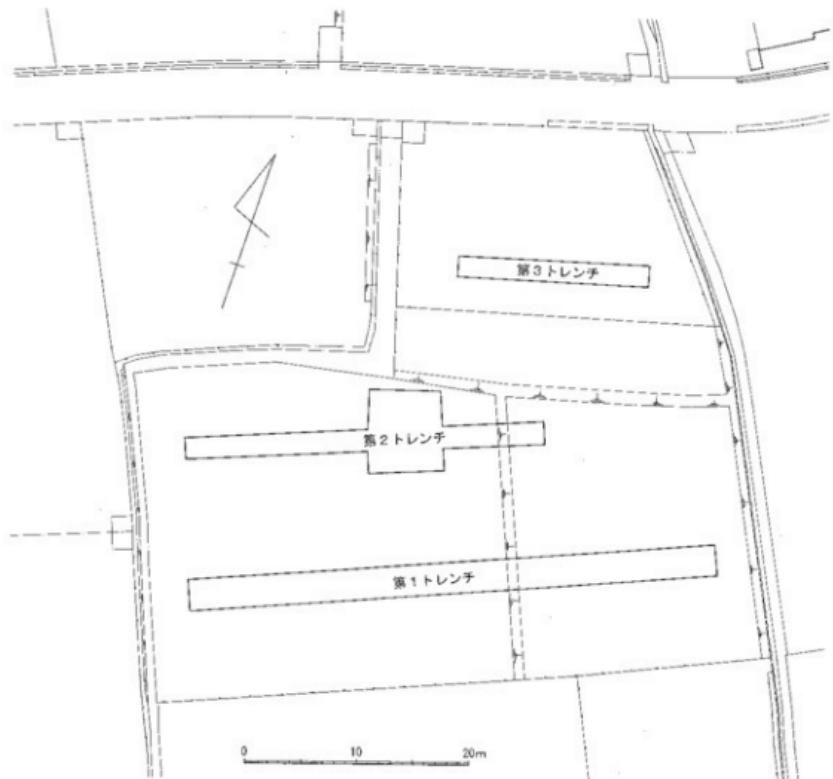
大麻山の北斜面の標高60~200m辺りには無数の古墳が点在し、磨臼山や鶴ヶ峰の尾根上にも国の史跡指定を受けたものを含めて数多くの古墳が存在している。磨臼山の山頂の巨石周辺からは弥生時代前期から中期頃の小型土器が出土していることから祭祀遺跡として周知されており、中腹から下方の傾斜地にもこれと同時期の土器や石器が多数散布することも知られている。



第3図 山南遺跡調査地周辺図

■ 小規模な河岸段丘

■ 調査対象範囲



第4図 山南遺跡トレンチ配置図

しかしながら、水田地帯である当該地付近に埋蔵文化財の情報は無く、これより900m東には南から北に流れる金倉川があるが、この氾濫の痕跡は当該地にまで及んでいる。南から来た流れが磨臼山南側斜面にぶつかり北東に流れを変えていた時期があるようで、調査対象地の東側は小規模な河岸段丘状地形を呈しており、0.7~1.0mの段差が見られるなどから、古代の生活遺構が存在する可能性は少ないと考えていた。ただ、当該地は古墳地帯に近接していることから小段丘上では古墳時代の生活遺構の検出が期待された。

この場所に香川県が公営住宅建設事業を実施することとなったため、平成9年に埋蔵文化財試掘調査を実施したところ、弥生時代前期以降各時代の遺物や10~14世紀頃の集落遺構が存在していることが判明したが、この隣接地では善通寺市土地開発公社による開発が計画されていたため、善通寺市でこれらの遺構の正確な範囲を確認することが必要となつた。そこで、土地開発公社と協議を重ね、平成10年夏に試掘調査を実施した。

試掘調査は最初に重機を使用し、対象地の南端と北端、中央の3箇所に東西方向のトレーニングを設定し掘削を開始した。トレーニングは南から第1～3トレーニングとした。

遺構の検出状況は以下のとおりである。

第1トレーニング 幅約3m全長47mの長い調査区で、全体的に比較的安定した地盤が確認できたが、東端は東に下る傾斜地となり、この肩に幾重のも砂層が堆積している。傾斜した地山面上に堆積した砂層中には弥生時代中期の土器や石器の包含が確認でき、この付近にまで金倉川が氾濫していたこととその時期が特定できた。(以下第5図参照)

また、遺構面上には20～40cmの厚さで弥生時代前期から中世にかけての土器片を少量含む包含層が堆積しており、この下から弥生時代前期と後期、その他時期不明の遺構が検出された。

SP-01～05は建物を構成するものではないようである。時期・性格共に不明である。

SK-01・02はほぼ3m四方の規模の不定形な遺構で、いずれも「土坑」としたが中央の深さは最大でも15～20cmと浅く、遺物等を全く伴わないことから自然地形である可能性も考えられる。

SK-03は直径約80cm、深さ40cm程度の土坑である。埋土等から周囲で検出された複数の柱穴と同一時期のものと判断されるものの、遺物は全く出土しておらず遺構の時期や性格は不明である。

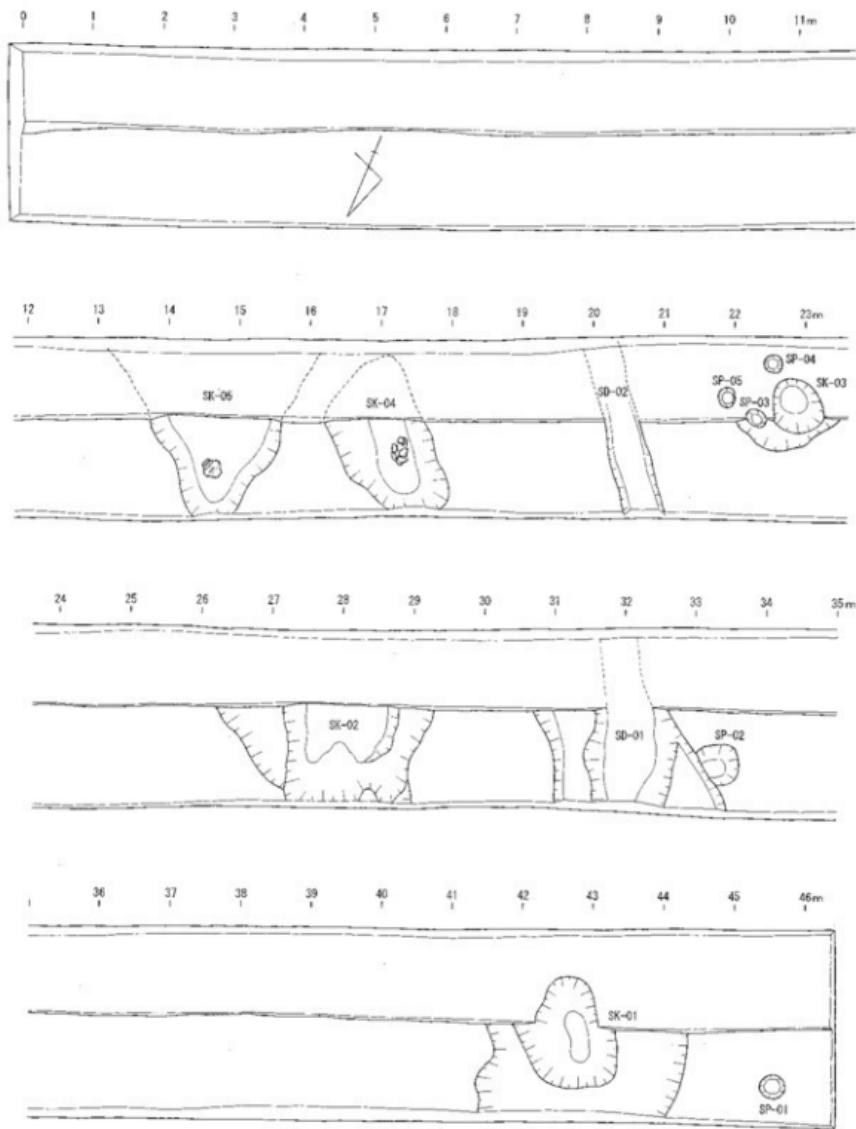
SK-04 幅1.2m、長さ2.5m、深さ0.15m程の楕円形の土坑である。この中からは後期後半の土器片が多く出土した。土器は遺構上部と共に削平されているものの比較的残りが良いこと、点数が少ないとことなどから、廃棄土坑ではなく祭祀遺構である可能性が考えられる。

SK-05 幅3.0m、長さ2.5m以上、深さ0.3m程の不定形な土坑である。形状や埋土はSK-04によく似ているが、この遺構からは弥生時代前期中段階の壺が完全な形で出土した。壺は斜めに土坑内に置かれており、他に遺物を全く伴わないこと、当時は河道に極めて近い状態であったと予想されることなどから墓ではなく祭祀遺構である可能性が高い。

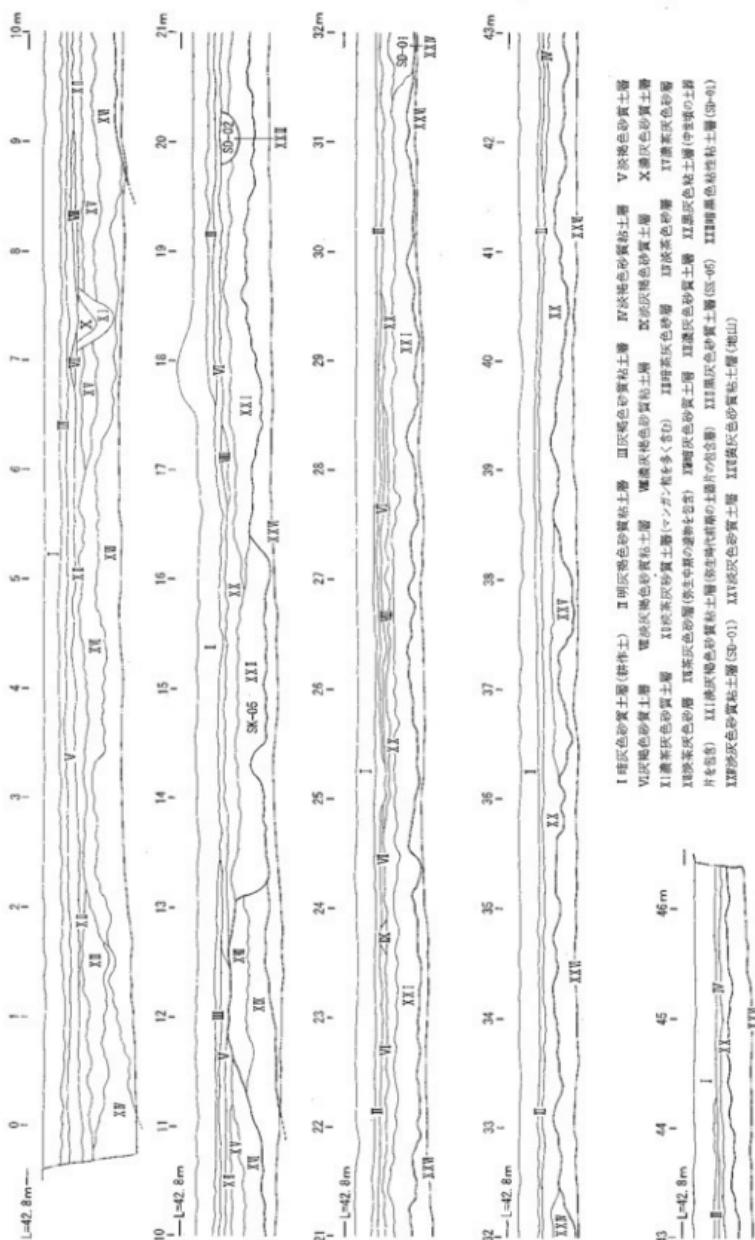
また、第1トレーニング東端はSK-05から東に1.5mの辺りから遺構面が大きく下り始め、その上には目の細かい砂層が幾重にも厚く堆積しており、頻繁に金倉川の氾濫があったことがわかる。また、傾斜部分の肩の直上に堆積した砂層中には弥生時代中期の土器や石器が包含されているが、その依存状況から余り遠くない上流から洪水等で運ばれたものと見られる。

SD-01は南北両側の壁面土層で同様の断面が観察できたため「溝」に分類したが、遺物等は全く出土しておらず、埋土がSK-01・02と同一であることから、狭長な窪み若しくは自然地形である可能性も考えられる。

SD-02は幅60cm、深さ20cm程の溝で埋土は暗黒色粘土の単一層、方位はN-50°-Wである



第5図 第1トレンチ遺構検出状況平面図



第 1 ドレンチ南側壁面土壤実測図

る。遺構の埋土中からはサヌカイト製の石鍬と弥生時代後期後半の所産と見られる壺の破片が出土しているが、いずれも混入したものと思われる。遺構の時期や性格は不明である。

第2トレンチ 幅2m、全長32mの調査区で、中世頃の所産と見られる柱穴や溝の他、弥生時代の土坑や柱穴を検出した。トレンチ中央部では竪穴住居跡(ST-01)を確認したため、検出部分の調査終了後、調査区を拡張し住居跡全体を検出した。(以下第7図参照)

SB-01 調査区に沿って等間隔に並ぶ3個の柱穴(SP-06~08)を検出した。その検出状況等から、掘建柱建物跡の一部であり、南北いずれかに対応する柱穴群があると予想される。柱の間隔はいずれも2.2m、方位はN-70°-Eである。柱穴内には根石を伴うもの(SP-06)もあり、比較的しっかりした建物が存在していたと思われる。遺物等は出土していないが、隣接する県の調査区では中世頃の同様の建物が多数検出されており、同様の時期の所産ではないかと思われる。

SP-09~13は建物を構成するものではないようである。時期・性格共に不明である。

ST-01は調査区中央部で検出された竪穴住居跡で、床面までの深さは40cmを計る。遺存状況は極めて良好である。規模は東西に4.7m、南北に4.4mのやや胴張りの隅丸方形で、ほぼ南北方位に向いている。

主柱(SP-15~18)の配置はほぼ正方形で間隔はいずれも約2mである。それぞれの壁面に沿って残るベッド状遺構は、東側では幅1m、残存高15cmある。西側では残存高はほぼ同じであるが幅が30~40cmと縮小している。

床面ではこれらの柱穴間を結ぶ溝状遺構が検出されたが、よく観察するとSP-15・16間とSP-15・18間の溝の埋土が住居下層の埋土とは異なり、木棺墓の木部の遺存状況に似たものであった。溝は幅10~15cm、深さ5cm程で、断面は半円形を呈しているが、SP-15・16間の東端約30cmの部分だけが幅5cm深さ10cm、断面が長方形を呈しており、形状が大きく異なっている。このような状況から、各主柱間下部には棒材や板材を用いた低い壁が造られ、この壁の外側に土を入れベッド状段を形成していた様子が想像できる。この最下段の木材が残された結果生じた痕跡である可能性が考えられる。従ってベッド状遺構も本来は検出されたものより高かったであろうと推測できる。

主柱に囲まれた床面直上からは弥生時代後期後半の特徴を呈する壺、甕、鉢など多数の土器が出土している。SP-18中からは甕が出土していることから、住居廃絶に伴い柱が抜かれてから入れられたものと見られるが、他にも小型土器が目立つことから、廃絶に伴う祭祀が行われたのであろう。

また、床面中央部からやや東寄りの部分に大きな扁平な河原石を伴う炭化物の堆積が認められた。炭化物を除去すると一部で焦土も確認できたが、長期の使用ではないようで、この火の使用も廃絶の祭祀に関わるものである可能性がある。

SD-03 方位や規模、埋土などから第1トレンチで検出されたSD-02に続くものと思われ

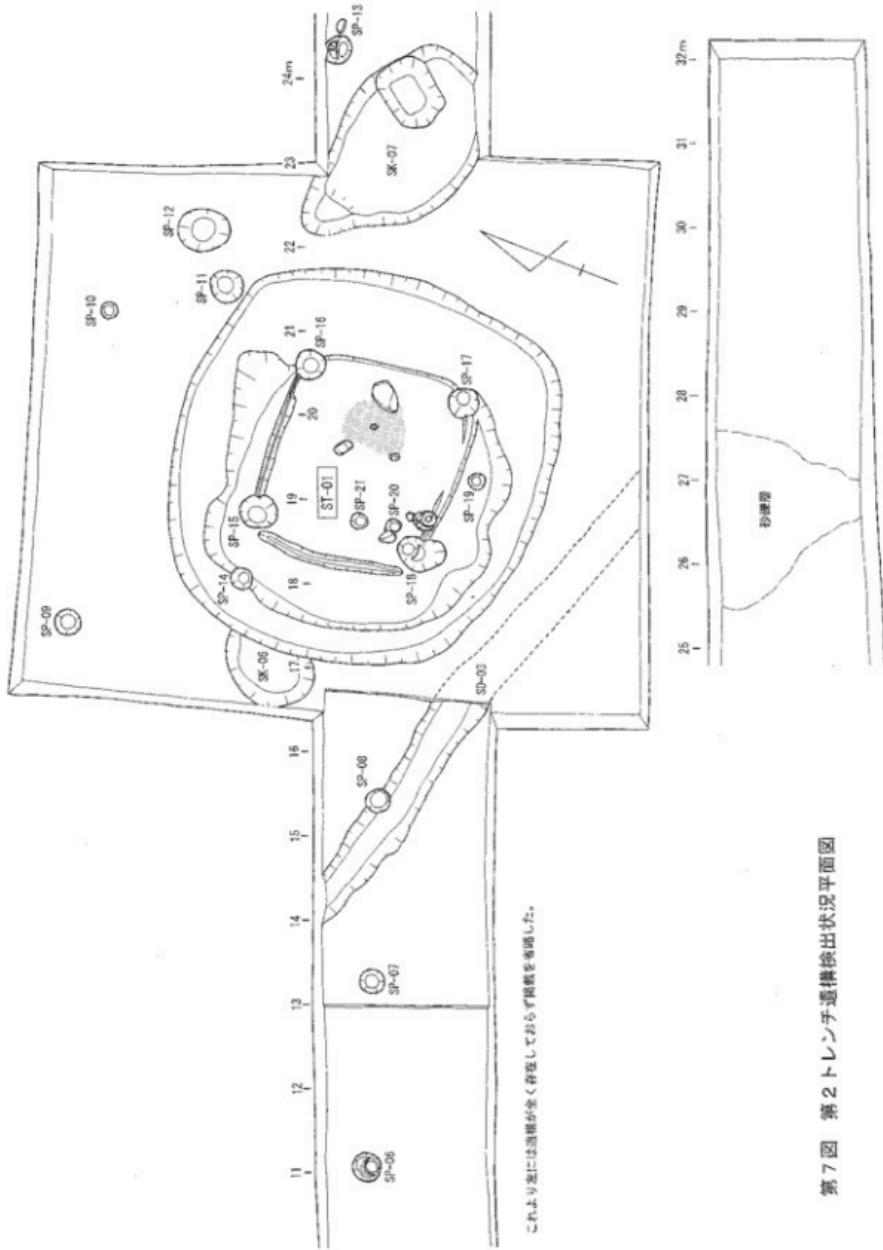
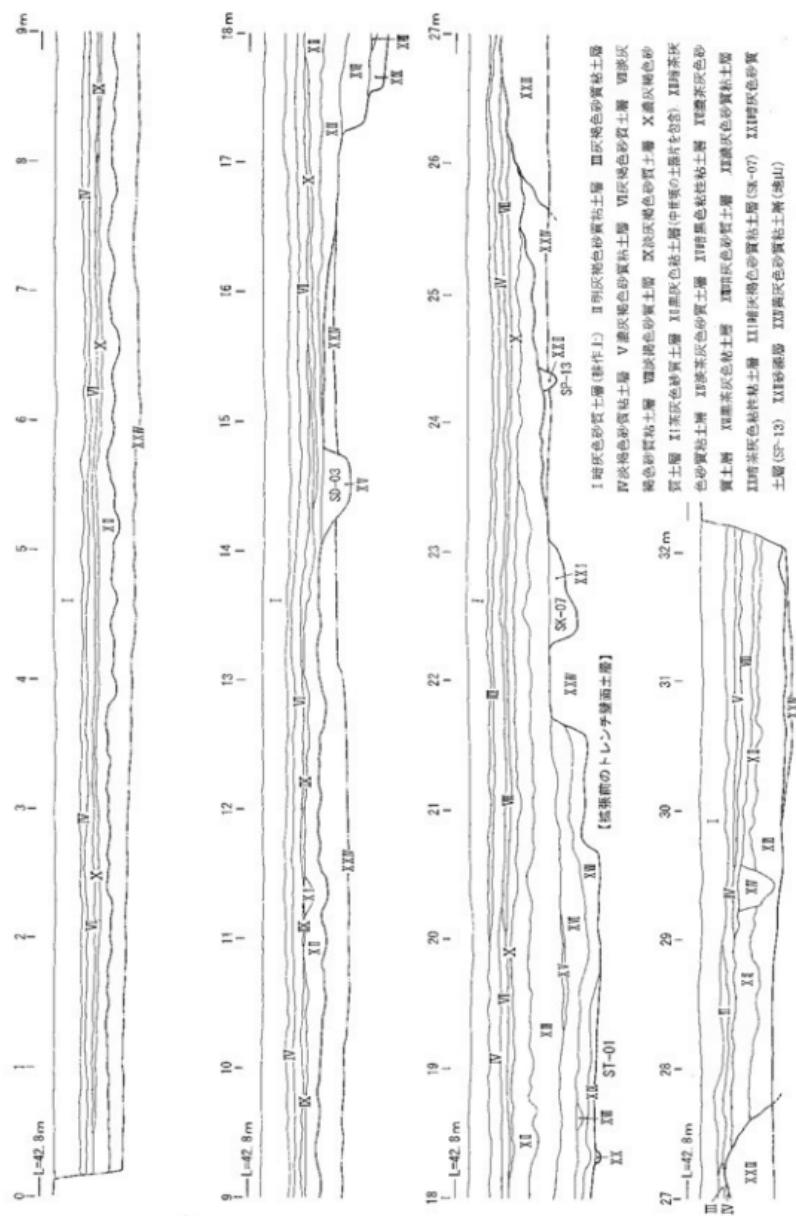


図7 第2回 チェンジ構造の状況平面図



第8図 第2トレンチ北側壁面土層実測図

る。この検出範囲での方位はN-70°Wであり、部分的には直線的であるが、河岸段丘の縁辺に沿って曲がるようである。やはりここでも時期を特定できる遺物は出土しておらず、遺構の性格や時期共に明らかにできていない。

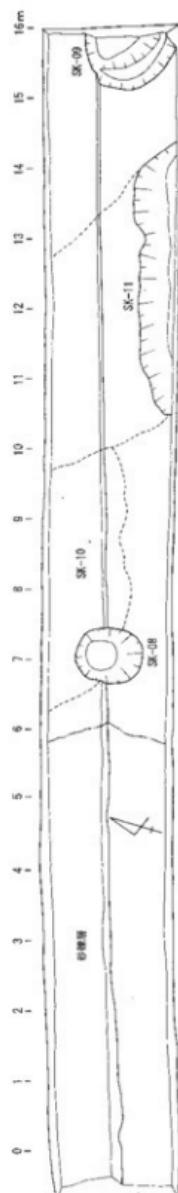
SK-06は直径約1m、深さ30cm程の円形の土坑で、遺物は全く出土していないが、ST-01に切られていることから、これ以前の所産であることがわかるが性格は不明である。

SK-07は南北に1.6m、東西に2.8m、深さ15cmの土坑である。この内部には方形の窪みが認められるが、遺物等は全く出土しておらず、時期や性格等は不明である。この東側には砂礫層が地山から突出している。金倉川が幾度も氾濫した際に生じた自然堤防と思われる。

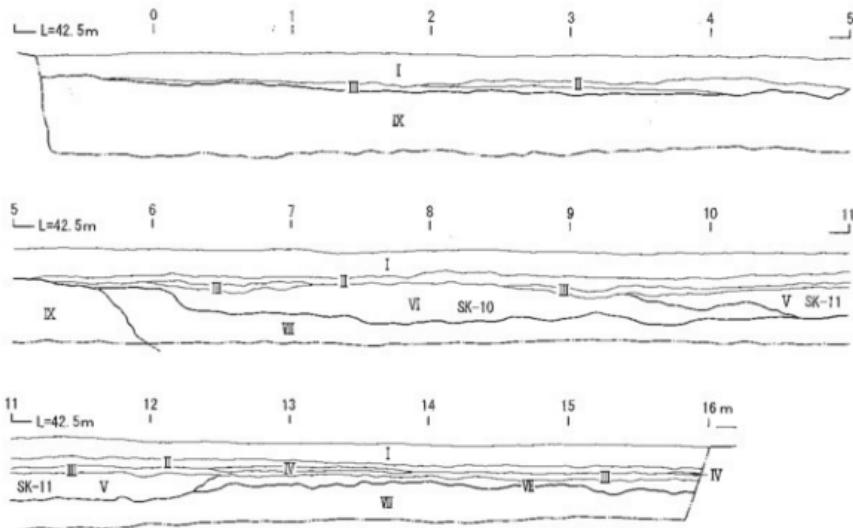
第3トレーナー 幅2m、全長17mの調査区で、西側半分耕作土直下が地山から突出した砂礫層で遺構等は存在していない。(以下第9図参照)

調査区中央では直径1m程、深さ60cmの円形土坑(SK-08)、東端では直径1.3m程、深さ80cmの円形土坑(SK-11)が検出されたが、埋土や周囲の遺構の状況等から近世の所産と思われる。

SK-09とSK-10はいずれも検出範囲で5mを超える大きなものであるが、深さは20~30cmと浅く、その底部には20cm前後の比較的扁平な河原石が敷かれている。SK-10がSK-09を切っているが、時期差はあまり無いようである。SK-10の埋土下層(礫中)からは近世末頃の所産と見られる瀬戸美濃の片口が出土しており、配石の様子や周囲の地形等から、近世の住居に伴う厨房のような施設の跡ではないかと思われる。



第9図 第3トレーナー追構検出状況平面図



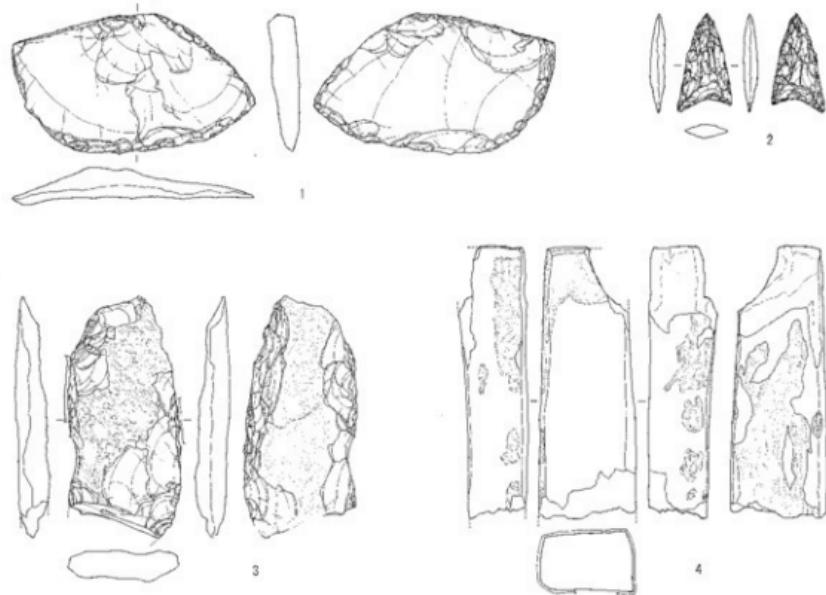
I 暗灰色砂質土層(耕作土) II 淡褐色砂質粘土層 III 明灰褐色砂質粘土層 IV 灰褐色砂質粘土層 V 明灰色砂質粘土層  
~砂礫を多く含む~(SK-10) VI 灰褐色砂質土層~砂礫を多く含む~(SK-11) VII 灰褐色砂質粘土層(マンガン粒を多く含む)  
VIII 黄灰色砂質土層(地山) IX 沙塵層

第 10 図 第 3 トレンチ北側壁面土層実測図

②出土遺物 遺構埋土や包含層からは多数のサヌカイト片と石器が出土している。小型の石鏃(3)は SD-02 の埋土中に混入していたもので、刃器[石包丁か](1)と比較的大きな石鏃(2)は第1トレンチのXVII層(茶灰色砂層)中に包含されていたもの、緑泥片岩製磨製石斧(4)は第1トレンチのXIII層(暗茶灰色砂質粘土層)中に包含されていたもので、いずれも弥生時代中期の所産である。(第11図参照)

土器は遺構に伴うものが多数確認された。弥生時代前期の土坑(SK-05)からは壺(5)が、弥生時代後期の土坑(SK-04)からは壺(7)・甕(8)・鉢(9)の破片が出土した。鉢(10)は SD-02 の埋土中に混入していたものである。11~22は弥生時代後期の竪穴住居から出土したもので、甕・壺・高壺・鉢と種類豊富で、後期後半頃の良好な一括資料である。片口(24)は第3トレンチで近世の土坑(SK-11)から出土した瀬戸美濃である。

弥生時代中期の高壺片(6)は第1トレンチのXVII層(茶灰色砂層)中に包含されていたもので、須恵器の壺片は第1トレンチのXX層(黒灰色粘土層)中に包含されていたものである。(第12図参照)



1-2 TR-01(包含層・土層実測図参照) 3 SD-02(櫛土に混入) 4 TR-02(包含層・土層実測図参照)

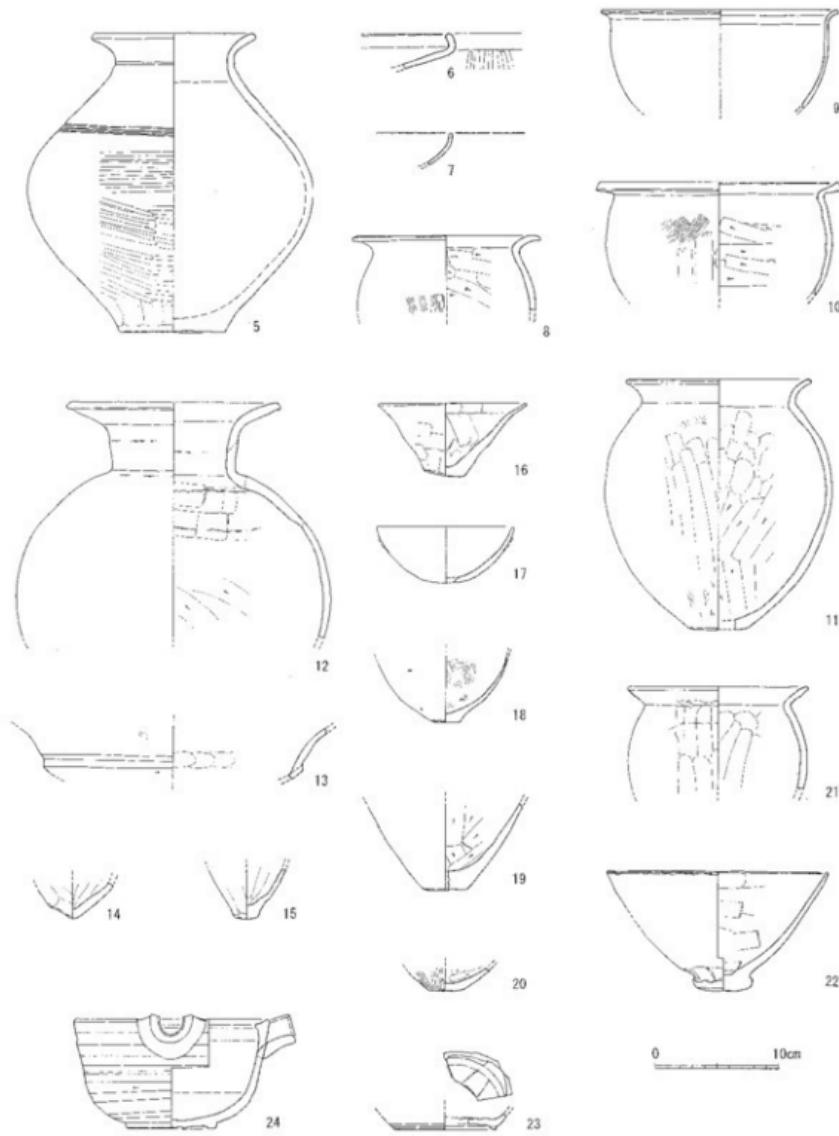
第11図 山南遺跡出土石器実測図

0 10cm

③小 結 山南遺跡では弥生時代前期以降の生活痕が確認できた。当該地は古墳地帯に近接していることから古墳時代の生活遺構の検出が期待されたが、意外にも包含層も含めて遺物さえ全く確認することができなかった。

この地域での埋蔵文化財の発掘調査はこれまでに全く実施されておらず、現時点では資料も極めて少ないとから、今回の調査で確認された各時代の生活域がどの程度の規模で、どのような範囲に広がっているのかを知ることは難しい。しかしながら、弥生各時期の明確な遺構や遺物が確認できたことは、丸亀平野全体を視野に入れての弥生時代の動向を考えるうえでは大きな成果であると言える。

また、ここより谷側の隣接地で実施された香川県による発掘調査は面積も広く、更にこの地の古代文化についてより多くの情報が得られるものと期待し、その整理と報告を待ちたい。



5 SK-05 6 TR-01(包含層・土層実測図参照) 7~9 SK-04 10 SD-01(埋土に混入)  
11~22 ST-01(11のみSP-18中) 23 TR-01(包含層・土層実測図参照) 24 SK-11

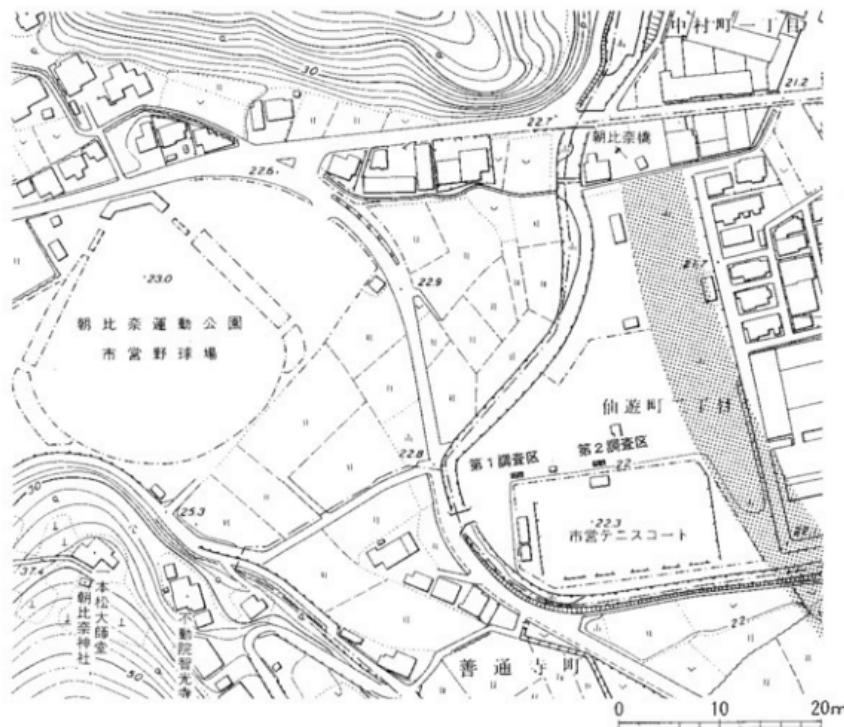
第12図  
山南遺跡出土土器実測図

### 第三章 旧練兵場遺跡群(彼ノ宗遺跡)

## ①調査の概要と遺構

旧練兵場遺跡は東西に約1km、南北に約0.5kmという広大な範囲に広がる、弥生時代以降連続と続く中枢的集落遺跡として知られている。遺跡範囲内には国立病院や四国農業試験場、市営住宅などの広大な敷地が含まれ、施設の老朽化等に伴う発掘調査が繰り返されていることから調査成果はかなり蓄積されてきている。しかしながら、遺跡の推定範囲が余りにも広大であるため、その詳細な範囲については未だ把握できていない。また、その時代によって集落範囲も異なっているようであり、現在のところは旧練兵場遺跡群として捉えている。

このうち最も西端に位置する彼ノ宗遺跡では、昭和59年に弘田川改修工事に伴う発掘調査が実施され、掘削範囲全域で住居跡等が密集状態で検出されている。河川の改修工事は



第13図 彼ノ宗遺跡トレンチ配置及び周辺図

#### これまでの調査範囲

## ■ 今回の調査区

既に完了しており、その東側は隣接するスポーツ施設の駐車場等として使用されている。この区域は弘田川の蛇行部分が取り囲んだ範囲で、施設拡充のための土木工事等が計画されつつあるが、その際に事業に速やかに対応するための詳細な遺構の範囲確認調査が必要な区域である。

そこで、遺構の広がる範囲を確認するため2箇所にトレンチを設定し、弘田川の旧流路など旧地形を把握する調査を実施した。

**第1トレンチ** 昭和59年の調査区から西に約100mの位置に幅1.5m、全長7mのトレンチを設定し重機での掘削を開始したところ、現地表面から40cmは花崗土の客土層で、これより25cm程掘削すると自動車教習所(昭和30年代開設)時代の建物の痕跡が認められた。この下には厚さ70cmの整地層が確認できたが旧陸軍時代前後のもので、この下面が弘田川の旧路面と思われるが遺構・遺物は全く存在していない。

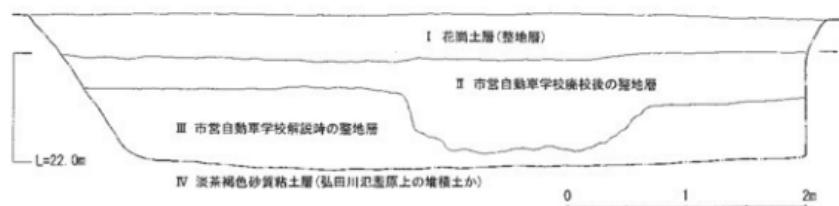
**第2トレンチ** 昭和59年の調査区から西に約50mの位置に幅3m、全長7m程のトレンチを設定したが、こちらでは現地表面下約30cmで遺構面が確認できた。部分的に搅乱が認められるものの、多数の土坑や柱穴が検出され遺物も数多く出土した。遺構面上に包含層は確認できず、遺構の依存状況等から遺構面は削平されていることがわかる。

柱穴は多数検出されたが、調査区が狭く建物を構成するものは確認できていない。大半の柱穴からは土器片が出土したが、いずれも碎片で時期が特定できるものは少ない。SP-14出土土器のみ弥生時代中期と確認できた。またSP-05中には根石が認められた。

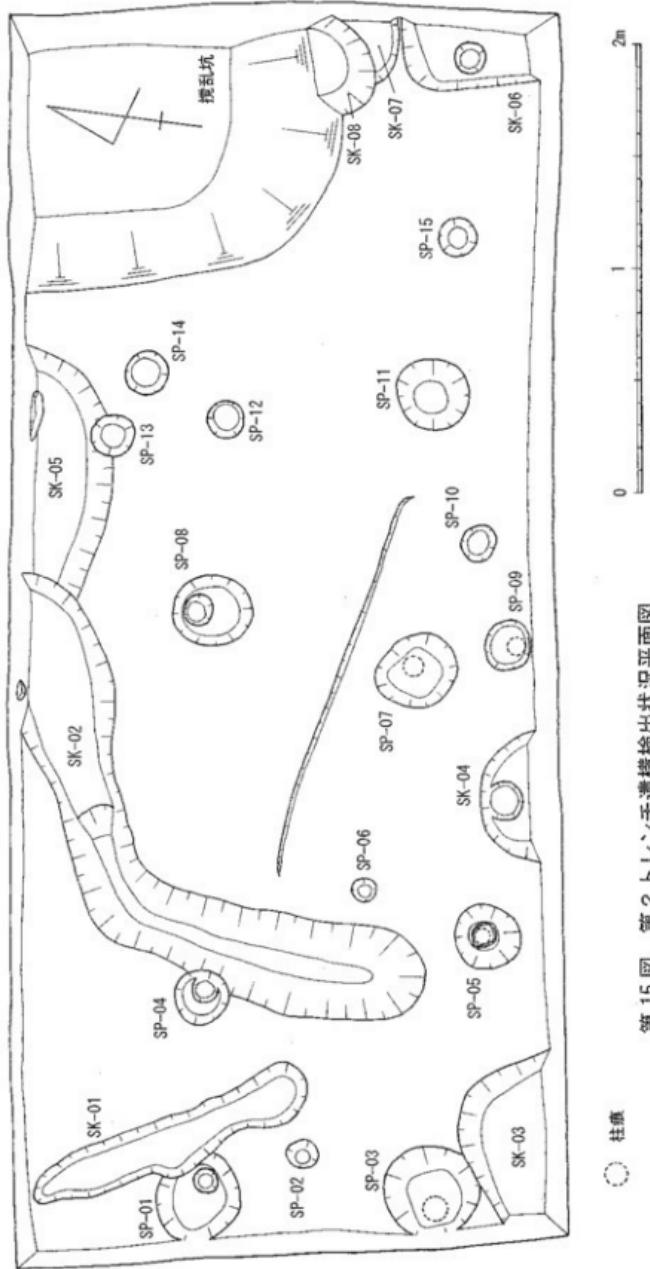
土坑は8基確認できた。殆どが部分的な検出であったため、性格等を明らかにできるものは無い。SK-02は幅が35~55cm、深さ20~45cmの狭長な溝状の土坑で、弥生時代中期頃の土器片と焦土塊が出土したが、遺構の性格は不明である。

SK-04は調査区南端で検出された範囲で最大70cm、深さ42cmの土坑で、弥生時代中期後半~後期初頭頃の土器片が出土している。土坑底部には直径20cm程の柱穴状の窪みが認められることから、柱穴の掘り方である可能性もある。この付近の過去の調査では、大型の柱穴からなる弥生時代中期頃の建物跡が多数確認されている。

SK-05はごく一部の検出であるため規模等は不明であるが、弥生時代中期の土器片と大



第14図 第1トレンチ北側壁面土層実測図



型石鏸が出土している。

調査区の北東隅は大きく攪乱されているが、この部分からは弥生時代中期後半～後期初頭頃の土器片や石器が多数出土した。また、SP-07とSP-08の間の遺構は、その形状等から方形若しくは隅丸方形竪穴住居の北壁の残存である可能性が高い。この範囲では、本来の遺構面は高かったものが削平を受け、深部にあった遺構のみが残されているようである。

②出土遺物 石鏸(25)は5cmを超える大きなもので弥生時代中期の所産と見られる。土器片は可能なものは全て図化したが碎片が多く、大半が遺構の埋土に混入していたものと思われる。SK-04から出土した鉢(31)と壺(32)のみ破片も大きく、出土状況等から遺構に伴うものと見られる。比較的大きな壺形土器(28)は片部の装飾が著しい。弥生時代中期から後期前半にかけての遺物が大半である。(第16図参照)

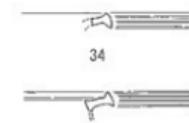
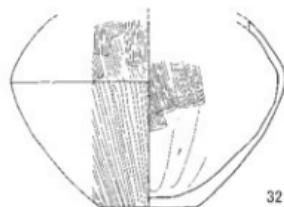
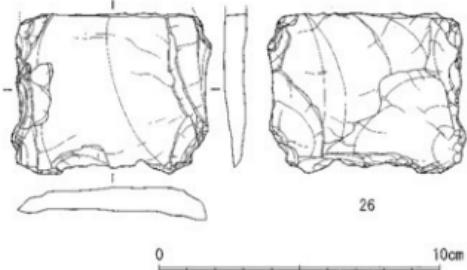
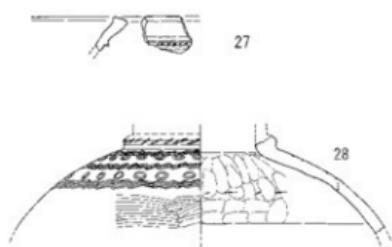
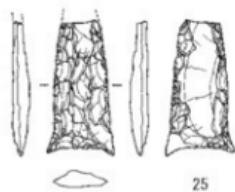
③小 結 第1トレンチでは予想されたとおり遺構が密な状態で検出された。また、現在はほぼ平坦な土地であるが、遺跡が形成された時期はある程度の起伏があり、高かった部分は遺構と共に削平されていることが判明した。

第2トレンチを設定した部分は弘田川の氾濫原であることが判明した。ただ新しい氾濫により遺構そのものが削られ消滅している可能性も考えられるが、この調査区と川の間には少なくとも遺構は存在していないようである。第1トレンチと第2トレンチの間で今後の開発に伴い調査が必要な範囲とそうでない範囲の線引きができると思われるが、具体的な位置は明らかにできていない。

いずれにせよ旧練兵場遺跡群と推定される範囲内には密度が濃く遺構が残っているようであり、今後もこれまで同様に地道な調査を積み重ねるしか無いようである。

普通寺市では昭和59年度の調査地の東側にある市営住宅の全面的改修工事を計画しており、工事の実施に伴う全面調査が予定されている。またこれとは別な大規模調査も予定されており、数年のうちに旧練兵場遺跡群西部の概要が判明するものと期待されている。

大規模調査による遺跡の各時代における広がり、また古代丸亀平野での旧練兵場遺跡群の果たした役割や成立過程等が解明される日を心待ちにしている。



25 SK-05 26 捣乱坑 27~30 SK-02 31·32 SK-04

33 SP-14 34·35 SK-05 36~41 捣乱坑

第16図 彼ノ宗遺跡出土石器・土器実測図

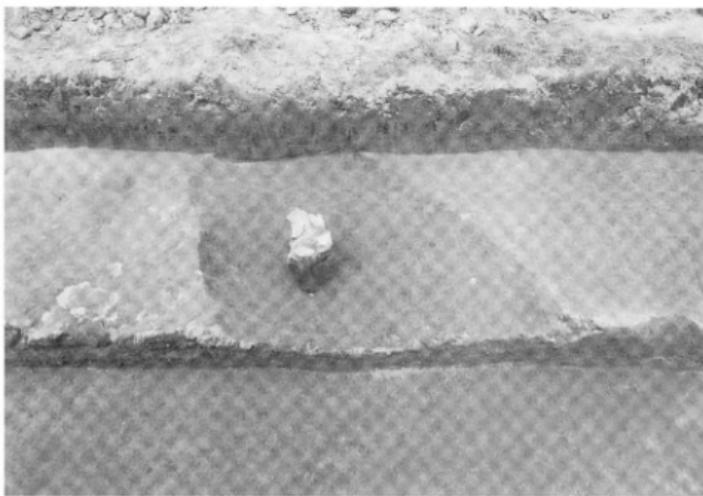
圖版



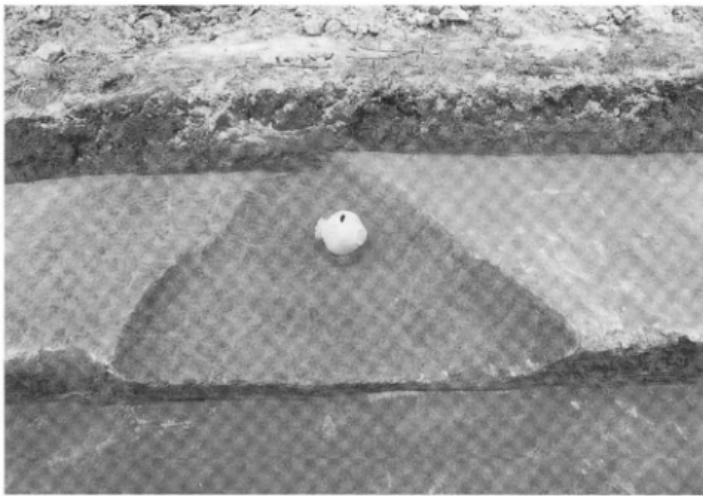
第17図 山南遺跡調査地全景(北東から)～調査前の状況～



第18図 山南遺跡・重機による掘削作業(西から)～第1トレンチ～



第19図 山南遺跡・SK-04 検出状況及び遺物出土状況(南から)



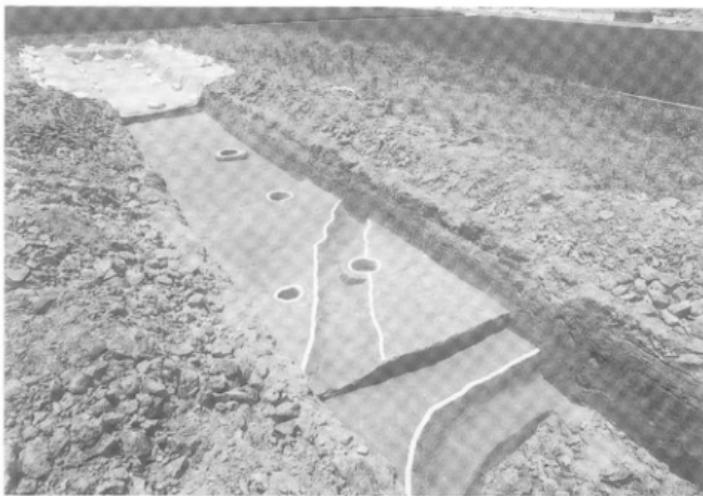
第20図 山南遺跡・SK-05 検出状況及び遺物出土状況(南から)



第 21 図 山南遺跡・SK-05 検出状況及び遺物出土状況(西から)



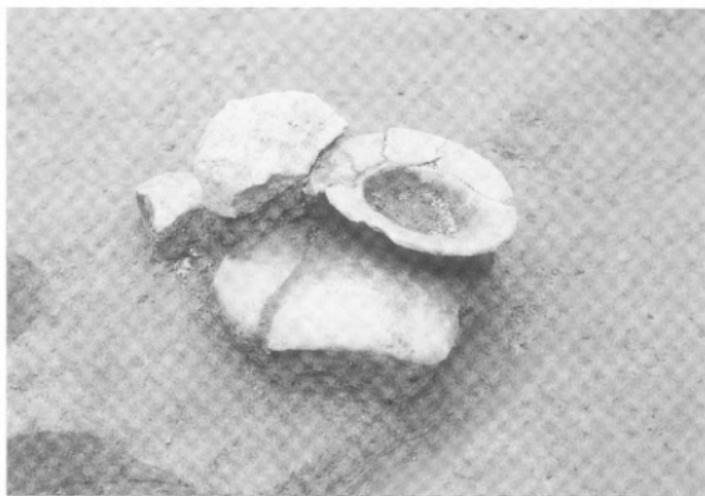
第 22 図 山南遺跡・第 1 トレンチ完掘状況(東から)



第23図 山南遺跡・第2トレンチ西側完掘状況(東から)



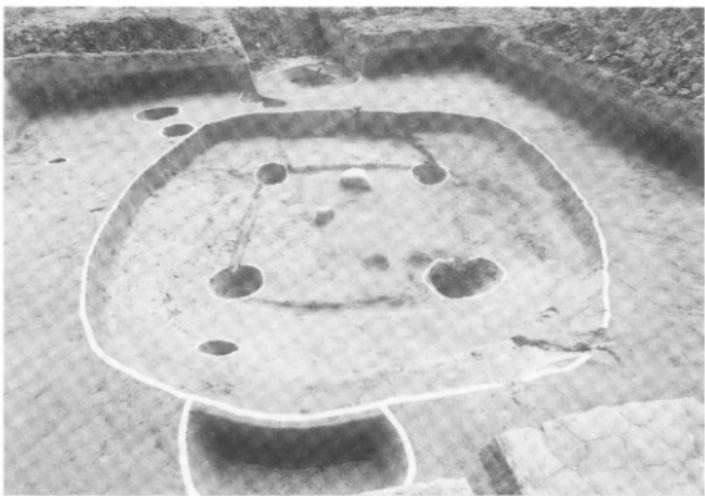
第24図 山南遺跡・第2トレンチ東側完掘状況(東から)



第25図 山南遺跡・ST-01 床面遺物出土状況(西から)



第26図 山南遺跡・第2トレンチ拡張後の状況(東から)



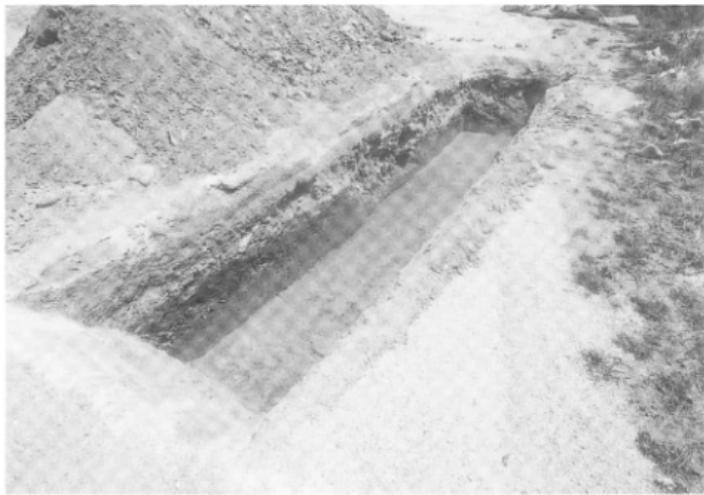
第27図 山南遺跡・ST-01 完掘状況(西から)



第28図 山南遺跡・第3トレンチ完掘状況(東から)



第29図 彼ノ宗遺跡・重機による掘削作業(北西から)～第1トレンチ～



第30図 彼ノ宗遺跡・第1トレンチ完掘状況(南西から)



第31図 彼ノ宗遺跡・第2トレンチ発掘調査作業風景(南西から)



第32図 彼ノ宗遺跡・第2トレンチ完掘状況(南西から)

## 抄 錄

ふりがな	やまみなみいせき・かのむねいせきはつくつちょうさほうこくしょ						
書名	山南遺跡・彼ノ宗遺跡発掘調査報告書						
副書名	～善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書5～						
卷次	5						
シリーズ名	善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
シリーズ番号	5						
編著者名	笠川龍一						
編集機関	善通寺市教育委員会 文化振興室						
所在地	〒765-0013 香川県善通寺市文京町二丁目1番4号						
発行年月日	西暦1999年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード番号 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
やまみなみいせき 山南遺跡	善通寺市 生野町山相 2919-1・2920 2921・2922	37204	34度 12分 42秒	133度 47分 46秒	19980616 ～ 19980727	240m <sup>2</sup>	普通寺市内遺跡 調査事業
かのむねいせき 彼ノ宗遺跡	善通寺市 仙遊町 二丁目 680-223		34度 13分 32秒	133度 46分 14秒	19980817 ～ 19980901	30m <sup>2</sup>	(遺跡確認 調査事業)
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
やまみなみいせき 山南遺跡	集落	弥生時代前期 弥生時代中期 弥生時代後期 中世	土坑 柱穴 掘建柱建物 竪穴住居 溝	弥生土器 石器 須恵器	弥生時代前期の土坑は祭祀遺構と思われる。また弥生時代後期の竪穴住居は非常に残りが良く、土器も多数出土している。		
かのむねいせき 彼ノ宗遺跡	集落	弥生時代中期 弥生時代後期	柱穴 土坑	弥生土器 石器	本遺跡は縄文時代後期以降の土器や遺構が確認されていたが、今回の調査区では弥生時代中期から後期までの遺構遺物のみの検出であった。		

## 山南遺跡・彼ノ宗遺跡発掘調査報告書

～善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書5～

平成 11 年 3 月 31 日発行

編 集 香川県善通寺市文京町 2-1-4

発 行 善通寺市教育委員会 文化振興室

印 刷 (株) 四 国 工 業 写 真